
イノセント

優輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イノセント

【Nコード】

N5507B

【作者名】

優輝

【あらすじ】

学校一バカな男子生徒、才。彼は、冗談で受けた超難関の高校「イノセント学院」に、何の間違いでか合格してしまう。しかし入ってみると、その学校は普通とは違い？

第1話　く旅立ちの日く

冗談だった。本当に冗談だったんだ。

まさか合格してしまうなんて思っていなかった。

あの、名門学校に、僕が。

学ラン。今時めずらしいのではないだろうか。でも、田舎じゃあ結構学ランの学校があるし、中学のうちは学ランが普通かなあって思ってた。下手すりゃ高校だって学ランという高校もある。

しかし、僕はこの春から学ランとは程遠い、機能性の高いカッコよくてセンスのいい制服を着ることになるらしい。

「おい！　あれ佐那比さなひ　才さいじゃね？」

そう言っ僕を指差すのは、佐藤君。いや、斉藤君？　どっちだけ？　……まあ、深くは考えない。僕は記憶力が悪いし、思い出さなくても害はないはずだ。

「佐那比って、あの超名門高校に合格した？」

「ああ」

「へえ。頭いいんだ？」

「まさか。バカだバカ。究極バカ」

名前不明君（だって分からないし）は、本人に聞こえているにも関わらずバカを連呼する。まあ、そんなことを言われて傷つく時期はとつくに過ぎた。何より、僕自身がそれを誰よりも認めている。

僕は、救いようがないバカだった。

少年漫画にある感動的な良い感じのバカじゃない。勉強という面においてだ。これは小学生からで、努力でカバーできるレベルじゃない。小学校低学年で、努力しても報われない事があるのだと悟った。早すぎる。もう少し夢を見たかった。

高学年からは努力すらも止めたせいだ、成績は下の下。どん底。当然、中学はズタボロだった。5教科の合計が三年間、三桁になったことが無い僕は、これも一種の才能じゃないかと思いついている。まあ、そんなわけで受験は絶望的。どんな高校だって、こんなバカが受かるわけがない。むしろ受かったら問題だ。

ここまで終わっていたら、もはや就職に期待するしかない。すぐには無理だが、もう少し年齢を重ねれば、バイトぐらいならできるかもしれない、と思うのが普通だろう。

でも、僕にはそれすらできそうもなかった。

僕は勉強だけでなく何をやってもダメな類の人間らしい。何をしても失敗ばかりする。夏休みの作品集なんて、いろんな意味で素晴らしいといわれた。

こんな僕をもらってくれる職場があるとは思えない。ただでさえ中卒だというのに。

だから、たぶん高校受験をしたのは僕なりの力ケだったのかもしれない。絶対外れる力ケ。でも当たれば大穴。

皆には、当然、止めるといわれた。ただでさえ見込みがないのに、そんな名門校を受けたところで不可能は眼に見えている。

それでも、僕は結局受験した。今思えば、何故そこまで執着したのか、自分でも良く分からなかった。

そうして僕はその高校に受験し、何の間違いでか合格してしまったのだ。

合格通知が送られてきたときは、ついに眼までバカになってしまったのかと本気で心配した。何度も確かめて、他の人にも見せて、それでも合格だったと知りやつと現実を受け入れた。

正直ありえない。

確かに、解答欄をすべて埋めることはできた。しかし、それはひとえにマークシート形式だったからだ。要するに勘だ。そして、僕は勘すらもほとんど当たらないのだということは、自他共に認める事実だった。

「何でバカが合格できんだよ」

「さあ？ 全く不明」

「本人に聞いてみれば？」

「あいつ何も言わないんだよ」

当たり前だ。僕が分からない事を、どうやって相手に伝えろというのだ。自然とため息が出た。

最近こんな感じの会話が多い。まあ、確かにありえないことではあるけれど、噂されている本人としてはこれほど疲れることもない。芸能人とか政治家ってこんな気分を味わっているのだろうか。正直、同情する。

「何で受かつちやっただんだろ……」

父は自分は冗談で受験したら、たまたま入れたとっていた。こちら辺では一番進学率が高い学校だった。もしかしたら、僕の家系はそういう運だけは強いのかもしれない。

僕はもう一度大きなため息をつく、学校に向かって歩き出した。

今日は卒業式。これが終われば、僕は名門校の寮に入るために旅

立つ。

寂しくは無い。

この学校で、僕と別れを惜しむような関係の人など誰一人としていないのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5507b/>

イノセント

2010年10月28日03時38分発行